



石籠の家

緑地帯の雑木林

石籠の家は富山県中西部に位置する射水市太閤山にある。地名は、豊臣秀吉が富山城を攻め入った際に陣所を構えたことに由来する。太閤山団地は50年前より、富山市や高岡市のベッドタウンとして開発が行われた。宅地が整然と配置された中に薬勝寺池や日宮城跡などの緑地が点在し、歴史と現代と緑が混在する閑静な住宅地である。そして、石籠の家が建つ敷地の北側には、団地内の高低差から出来上がる法面に、幅20m、長さ600m以上の公共の緑地帯が隣接している。

施主はアウトドア好きの若い夫婦で、自転車や山スキー、キャンプと多彩な趣味を嗜む。そんな夫婦が敷地の決め手としたものが隣接する緑地帯である。本敷地は、この緑地帯があることで北側低位置の住宅地の気配を全く感じさせない。そのため、施主は住宅密集地ではなく林の中にいるような印象を受けた。元々この地域の住宅団地は敷地面積が60~80坪の土地が多く、駐車スペース2台分を確保すると、広い庭を設けることが出来ないため密集感が生まれる。そのため、この地域では緑地帯をより力強く感じ、これを建築におけるコンテキストとした。

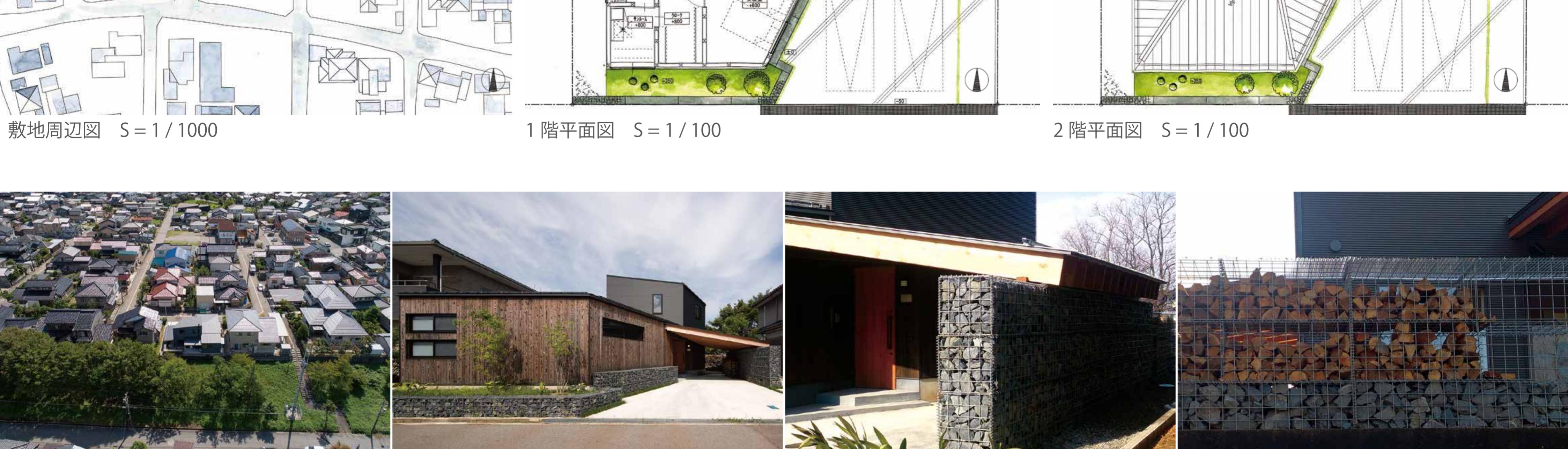
緑地帯との関係

建築に緑地帯の風景を取り入れるために、前面道路から緑地帯までの通り抜けを設けた。また、壁面を斜めにすることでパースペクティブが効き、緑地帯までの距離感をより印象付けた。壁面の構成は緑地帯と共に鳴る素材を模索した。結果、割肌を残す石積みを見い出し、より原始的な石籠(蛇籠)とした。建築本体の壁面も焼杉搔き落しの板張りにすることで、全体的に時を経た建築の佇まいとなった。平面計画は北側緑地帯への開放に重点をおいた。これにより豊かな自然を借景した、瑞々しい生活がもたらされる。

自然と共に暮らす

完成して数ヶ月が経ち、石籠の家を訪れた時、以前からここで生活しているような感覚を受けた。それは、施主の暮らしがこの住宅と同調できているからではないかと思う。土間で自転車を整備し、スキーをチューンナップする。テラスで薪を割り、石籠を利用した薪棚兼目隠し垣へストックする。樹木の見えるキッチンでお茶を入れ、ストーブの横で飲む。様々な生活シーンが行われていた。

全ては施主が緑地帯の自然への想いの強さから始まった建築づくりだと思う。石籠や焼杉板などの自然を受け入れる施主の寛容性に導かれた建築である。



敷地周辺図 S=1/1000

1階平面図 S=1/100

2階平面図 S=1/100

俯瞰写真

緑地への誘導

石籠(蛇籠)の堀

石籠(蛇籠)と薪棚

素材

玄関

土間空間

リビングからテラスを見る

南側の光はリビング上部のハイサイドライトから取り入れている

リビングからキッチンを見る

キッチンからテラスを見る